

親はどのようにして青年期に統合失調症を発病した子どもと折り合うのか

福祉心理学専攻 黒子 まゆみ

1. 目的

統合失調症は、本人の病識欠如が特徴的な精神疾患で、罹患率は1パーセントである。また、多くは思春期から青年期に発症し、未だ原因は不明である（厚生労働省，2021）。そのため、幻覚や妄想症状をもつ当事者と親の現実認識の落差は顕著である上に、病者の奇異な行動から世間の偏見にさらされ、家族の苦悩ははかりようがない。病前の人格から変調を重ねて別の人格に変容していく我が子と、親はどのように折り合いをつけていくのだろうか。

また、統合失調症者の生活自立に対し、家族支援は物心両面で重要な役割を担うので、そのためには病前とは異なる親子関係の再構築を図ることが不可欠である。しかし、発病した子どもとの共存について、親自身の心理的変容についての研究は見当たらない。

そこで、本研究では、青年期に統合失調症を発病した子どもをもつ親へのインタビューを行い、どのように親子関係の折り合いをつけていくのかプロセスモデルを生成する。

リサーチ・クエスチョンは以下である。

- (1) 病気受容をめぐる親子関係の変化
- (2) 関係の折り合いをつけるプロセスでの親の価値観の変化
- (3) 病者の親を支える要因

2. 方法

- (1) 研究協力者 青年期に統合失調症を発病した子どもをもつ親4名
- (2) 調査方法 半構造化面接によるインタビュー調査
- (3) 分析方法 グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）

3. 結果

研究1 大学在学中に発病した息子と母親との折り合いのプロセス

①大学2年で引きこもった息子を元に戻そうと躍起になった、②陰性症状で診断されないまま大学を中退した、③父の転勤先で同居し無為状態を受け止められず苦しんだ、④引きこもり家族会と学習会とカウンセリングに支えられた、⑤5年目にデイケアに外出し統合失調症と診断された、⑥それまで築いた生活基盤に息子の居場所は得られなかった、⑦診断後家族でしがらみのない田舎に移住した、⑧田舎の病院と作業所と家事の中に息子は役割を得て安定した、⑨母も精神疾患の家族の電話相談を受けながら自己研鑽している。

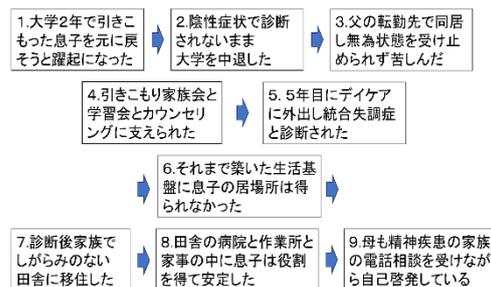


図1 大学在学中に統合失調症を発病した息子と母の折り合いのプロセス

研究2 中学校で発病した息子と発達障害の兄を含む家族の折り合いのプロセス

①中学でのいじめで人間不信になり別室登校をした, ②陽性症状に苦しみ統合失調症と診断された, ③病気ともあれ将来のために高校進学努力をした, ④息子が不登校になった頃パートから正社員になり仕事が楽しかった, ⑤母は祖母に助けられ子をサポートした, ⑥浪人して進学高に入学したが不登校になり担任の配慮で卒業した, ⑦大卒後自宅にこもるASD兄と弟の関係悪化に母は仕事を辞職した, ⑧息子は一人暮らしを始め作業所に通ったが仕事は続かなかった, ⑨苦悩は当事者にしかわからないので支援資源に恵まれてほしい。

研究3 就労後に発病し闘病中に死別した息子と母親との折り合いのプロセス

①就職した23歳の息子は体調不良で帰郷した, ②奇異な言動の連続で強制入院になった, ③診断は衝撃的で受け入れられなかった, ④家族会と支援職の支えで息子を支えようと決意した, ⑤本人は作業所やデイケアで病気を受容した, ⑥作業所仲間と結婚したが破綻し再発した, ⑦暴走し行き詰まると息子は最終的に母を頼った, ⑧49歳で突然死した, ⑨死なれてみると子がいてこそこの張り合いだった, ⑩許しを乞い拝む母は息子に感謝しかない。

研究4 大学中退後寮付きの職場で発病した息子と母親との折り合いのプロセス

①大学2年で中退し帰郷後は寝てばかりいた, ②就職したが帰郷後統合失調症と診断された, ③母は自責と悲嘆で眠れず父と責任をなすり合った, ④傍の息子は薬の大量服用で入院した, ⑤母は胃がんを発病し息子と入れ替わりに入院した, ⑥息子から距離を置き家族会や趣味とつながった, ⑦7年続いた鬱状態から躁転し暴れた, ⑧実情に合わないことをやめるうちに平穏が訪れた, ⑨障害受容とは息子と自分と家族と仲間の受容だった。

4. 考察

(1) 病気受容をめぐる親子関係の変化

子どもが引きこもったことで、いずれの親も子育てを自責し、自らを追い詰めた。受診し、統合失調症と診断された時は混乱し、不安と孤独感との闘いであった。やがて家族会につながると、病気を学び疾病を受容し、子どもとの関係の再構築に向き合えるようになった。一方で、子育ての後悔と将来の不安は払拭できずにいたが、子どもとの距離が保たれることで、将来を見据えた親自身の生き方が模索された。

(2) 関係の折り合いをつけるプロセスでの親の価値観の変化

偏見との闘いを経験した親は、人の痛みがわかる人間になったと語り、苦悩や葛藤などネガティブな情動からそれを許容する人間力が生み出されていたことがうかがわれた。また、発病初期には元に戻そうと必死だった親は、病者の子どもと共存する親子関係の再構築というプロセスを経て、子どもではなく自分自身を変容させていたことが理解された。

(3) 病者の親を支える要因

子どもが統合失調症を発病した不安な時期に、親を支えていたものは、家族会で出会った我が子を多様に支えるしなやかな親モデルたちの存在であった。同質の共通体験をもつ仲間の支えがあってこそ、子どもとの関係の再構築につながったことがうかがわれた。